

## 新任学芸員紹介

本多 里奈



### (1) 自己紹介

令和4年4月より自然の博物館に配属となりました、学芸員の本多里奈と申します。動物担当で、鳥類を専門としています。

### (2) 来歴

自然好きの祖父の影響を受け、物心がついた頃から鳥や自然に慣れ親しんできました。小学生のときは、鳥を観察したり、サンショウウオの産卵を見に行ったり、星を見たり、とにかく1日中野外で遊んでいました。中学・高校時代は一時的に自然から離れてしまいましたが、大学ではしっかりと生物の勉強・研究をしたいと思い、青森県の弘前大学で鳥の生態や行動の研究に明け暮れました。

研究をすればするほど、生物の面白さや巧妙さを実感しましたが、これを研究者や生物が好きな人以外に知ってもらえる機会がほとんどないことに對して悔しさや寂しさも感じました。生き物に興味がない人、生き物の面白さに気づいていない人、気付く機会に恵まれなかった人に、生き物やその面白さを知るきっかけを提供したい！という想いを持ち、博士課程修了後に埼玉県立自然の博物館にやってきました。

### (3) 研究について

ウ類やサギ類といった大きくて魚を食べる水鳥

が私の研究対象です。これらはコロニー（集団営巣地）を形成するコロニー性鳥類と呼ばれる鳥たちです。コロニーは大きいものだと数百、数千もの巣から成り、コロニー性の鳥類たちは常に密な状況で子育てをします。また、コロニーには1種だけで構成されるもの（単独コロニー）と複数種で構成されるもの（混合コロニー）があります。混合コロニーの中では、様々な種が狭い空間にギュッと集まっているため、種間で資源を巡る競争が生じたり、互いを利用しあったり、様々な「イベント」や「関わり合い」が生じます。私はこれらに注目し、ウ類やサギ類の行動や種間相互作用を研究しています。例えば、カワウは自身で積極的に捕食者を追い払うことはせず、アオサギの対捕食者防衛行動を一方的に利用していることがわかってきました。



写真1 カワウのコロニー。巣間の距離は非常に近い。

また、ウ類やサギ類の中で、近年個体数が増加しているカワウやアオサギは、漁業被害や農業被害を及ぼすことから「害鳥」と呼ばれています。もちろん、人にも生活がありますから、こういった名前をつけて付き合い方を考えることは必要です。しかし、「害鳥」である前に彼らは「カワウ」であり「アオサギ」であるのです。彼らの行動や生態の純粋な面白さを追求・発信しつつ、得られた知見が巡りめぐって軋轢解消のヒントになればと考えています。



写真2 巣材を運ぶアオサギ。繁殖期初期のアオサギはくちばしや脚が夕焼け色に染まる。

#### (4) 鳥と教育普及活動

鳥は比較的人気のある生き物で、「かわいい」「きれい」「かっこいい」…など、生き物に興味を持ってもらううえで入りやすい入口をたくさん持っていると思います。学芸員の大事な役目は、そこから更に一步踏み出した場所にある「科学的に面白い」というところまで、みなさんをお連れすることだと考えています。

その理由の1つには、ただ純粹に、生き物を知って興味を持ってもらいたいという想いがあります。生き物のもつ魅力は「かわいい」「きれい」「かっこいい」という表面的な部分だけではありません。むしろ、一見すると「かわいい」などからかけ離れた生物もいます。私の研究対象であるカワウやアオサギも、一般的に見れば表面的な魅力は他の鳥に比べるとやや乏しいかもしれません。コロニーも、中に入れば数百、数千もの鳥の叫び声が響き、フンや鳥が吐き戻した魚の臭いが漂い、地面ではシデムシが蠢うごめいています。お世辞にも気持ちの良い光景や環境が広がっているとは言えません。でも、彼らの生態・行動やコロニーの中は本当に魅力にあふれています。科学的に、つまり遺伝、生理、形態、行動、生態、保全などの多様な視点から見て、生物やそれをとりまく環境に魅力を感じてもらえるような活動ができればと考えています。

もう1つの理由は、みなさんを「科学的に面白い」のさらに先にまでお連れしたいからです。「科学的に面白い」の先には「どうして〇〇という性質を持ったのだろう」という疑問の空間が無数に広がっています。この疑問を持つ・考えるという

作業は、すぐに答えを提示してくれるインターネットの普及と共に、少しずつ時短化・簡略化されてしまっているように思えます。でも、この疑問を持つ・考えるという作業は、実はとても楽しいものだとは私を感じています。たくさん調べて試行錯誤をして、ようやく答えにたどり着いたときの達成感や世界が広がった感じは、他では味わえないと思います。また、今後さらに求められるであろう科学的・論理的に物事を考える能力を培ううえでも非常に重要です。疑問を持つ・考える楽しさや達成感をたくさん感じてもらいつつ、大事な力を育てるお手伝いに繋がるような活動ができればと考えています。



写真3 巣材を運ぶカワウ。繁殖期のカワウは「白髪鵜」と呼ばれ、真っ白な頭がとてもよく目立つ。

#### (5) おわりに

鳥は非常に身近な存在で、みなさんのお家の周りにも様々な種類の鳥類が生息しています。少し足を伸ばして高山、低山、草原、田んぼ、川、湖、海など違う環境に行けば、それぞれに違った鳥が生息しています。鳥やそれを取り巻く環境のこと、彼らが持つ科学的な魅力を展示や活動を通してお伝えしていきます。みなさまと一緒に五感をフル稼働させて、「生き物って面白い!」「自然って楽しい」と感じていければ幸いです。どうぞよろしく願いいたします!



(ほんだ りな・学芸員)